七帝柔道、25 年目の再会　松永大吾

はじめに

平成 28 年夏、ひょんなことから「ゴング格闘技」の編集長さんとの交流が始まった。きっかけは、同誌に掲載された総合格闘技王者の村山暁洋氏に対する特集記事の中で、柔道を始めた頃に出会った指導者として、彼が私の名前を上げてくれたこと。京都大学の卒業と同時に信州大学の医学部に再入学した私は、当時は選手兼コーチとして信州大学柔道部を指導していた。そこに週 3-4 回、熱心に通って来ていた体幹のやたらと強い白帯の高校生が、その村山氏であった。そんな縁があって、ゴング格闘技に掲載してもらう予定であったのが、この観戦記である。残念ながら同誌は休刊となり、私の拙文は日の目を見る機会を失った。だが、幸運にもここに掲載させていただく機会を得た。関係各位のご尽力に感謝するとともに、七大学を目指している高校生や浪人生へのささやかな応援歌となることを願っている。

平成 28 年 7 月 10 日、私と中学 3 年になる長男は、じりじりと夏の日差しが降り注ぐ世田谷の高級住宅街を通り抜け、日体大の世田谷キャンパスを目指して歩いていた。

平成 3 年 7 月、七帝戦 10 連覇中であった京大柔道部が、打倒京大へ一丸となった北大柔道部の凄まじいエネルギーに圧倒されたあの日以来、その試合に京大の大将として出場しながら、北大の副将として立ちはだかった巨漢・後藤康友氏の気迫と自身の連覇への重圧に負け、なすすべもなく引き分けてしまってから 25 年。実に四半世紀振りの七帝戦（七大戦）との再会が迫っていた。

「やっぱり七大戦は、夏の暑いときにやらんと盛り上がらんなァ」。京大柔道部で 5 学年上の岡本啓先輩が、数年前に偶然出会ったときにつぶやいたセリフが思い出される。昨年度まで七大戦は 6 月の後半に開催されていたが、確かにそれ以前は 7 月中旬に開催されていた。忘れもしない。25 年前のあの日も、7 月のクソ暑い日だった。あの日以来、私はずっとその敗北の呪縛から逃れられずにいた。会場が近づくにつれて息遣いが荒くなっていくのは、夏の日差しのせいだけではないようだ。

「父ちゃん、番地が近づいているからもうすぐだよ」。試合会場の住所だけが書かれた七大戦の案内状を片手に、電柱の住所表示を見ながら長男が教えてくれる。ちなみに

私はガラケーしか持っていないし、ガラケーの GPS 機能すらまったく使いこなせない。

日体大の警備員さんの案内で地下道場に到着したのは、予定到着時刻よりも 30 分ほど遅れた 11 時過ぎであった。だが、会場であるはずの地下フロアの廊下には、新体操教室の生徒らしい数名の少女がいるだけであった。こんなところで伝統の七大戦が開催されているとは、にわかには信じがたい。

それでも「柔道場」と表示された方向に向かって歩いていく。ようやく柔道着のズボンに T シャツ姿の若者と遭遇する。度の強い眼鏡と知的な顔つきとは対照的に、グシャグシャに潰れた餃子耳と、僧帽筋と広背筋がやたらと発達した寝業師らしい筋肉の付き方が、七大の選手であることを物語っている。

さらに高まる胸の鼓動を抑えながら、とうとう柔道場の入り口にたどり着く。

突然、そこだけ世界が変わったかのような光景が目の前に広がる。2 面だけの狭い柔道場に、ぎゅうぎゅう詰めで観客が入っている。耳の潰れた若者から老人までが、熱狂的な応援を繰り広げている。

ちょうど手前の試合場では、京大対名大の準決勝戦が行われていた。奥の道場では、阪大対東北大の準決勝戦。観客が多すぎてとても柔道場には入れないので、そのまま下駄箱から観戦する。試合は中盤、ちょうど京大の選手が絞められて 2 点のビハインドとなったところであった。

すぐ横で観戦していた男性と目が合う。1 学年上の小松徳太郎先輩だ。ガッチリとした体つきと、相変わらずハリネズミのような毛髪は、もうすぐ 50 歳という年齢にしてはかなり若々しい。だが 25 年も経つと、その顔にはまるで映画の特殊メイクでも施したかのような深い皺が刻まれている。

「久しぶりやなァ、噂では全柔連でゴッツ出世しているらしいやないか」。昔と変わらない、まくしたてるような口調で、先輩が茶化す。大阪出身で河内弁がきつく、自分にも他人にも厳しかった先輩のいきなりのツッコミにうまく対応できない。

たどたどしい口調で、「そんなことはありません。どうやったら柔道の事故が減って、昔みたいに柔道人口を増やせるのか、そういう仕事に取り組んでいるだけです」と答える。自分でも呆れるほど、ぎこちないしゃべり方だ。

長野市内の病院でスポーツ整形外科部長として働く傍ら、京大卒業後も信州大学柔道部のコーチや監督として柔道界とつながってきた関係で、私は全柔連の医科学委員会や重大事故総合対策委員会の委員に名前を連ねている。とはいえ、柔道界で出世している

という自負はないし、何の野望もない。ただでさえ医者として多忙を極めている中で、それでも全柔連の仕事をしているのは、ただ純粋に柔道界を盛り上げたいからだ。ここまで育ててもらった柔道に恩返しがしたい。おこがましいかもしれないが、東大柔道部OBで政経界の重鎮である全柔連の宗岡正二会長も、私と同じような思いではないか。

「このままやったら、負けるで」。小松先輩が試合の話題に切り替える。2 点のビハインドでは、京大の主将で抜き役（ポイントゲッター）である嵯峨健史君と、相手の強力な分け役が当たる計算になるらしい。

だが、ここから京大がじわじわと戻していく。京大の巨漢2回生飯田真太郎君が1人抜き、次を分けた。荒っぽい寝技が目につくが、必死にがんばる姿勢にエールを送る。

そして4回生の関拓弥君。足が良く利く。「ザ・京大柔道」という下からの防御と攻撃で魅せる。かつて私の1学年上の林克彦先輩がやっていたような変形の浅野返しで相手を誘い込み、上四方固めに移行して1人抜く。次の相手も同じような展開となるが、相手も警戒して深入りせず。これで試合をタイに戻す。京大ベンチが一気に活気づく。

引き分け2試合を挟んで、副将で登場した京大主将の嵯峨君が名大の1回生コンビを簡単に寝技で仕留め、あっさりと決勝進出を決めた。

遅れて隣の試合場では、追い詰められた阪大が、元高校チャンピオンで医学部2回生伊藤祐輝君の驚異の 4 人抜きで大逆転劇を演じ、決勝にコマを進めた。寝技中心の 1 本勝負（勝敗の決着は1本のみ）という七大ルールにおいて、大将副将を含む4人を抜くというのは、七大戦の長い歴史の中でも数えるほどしかない快挙である。しかもその相手が、伝統の堅い守りで上位安定をキープしている東北大だ。

決勝前の休憩時間が取られた。ようやく試合場内に入ることができたため、軽く知り合いに挨拶をして回る。知っている顔は多いが、何せ25年も経つと顔と名前が一致しない。

とりあえず、大阪府警の元谷金次郎先生に挨拶。元谷先生は、ちょうど私が京大に入学した昭和62年に初めて京大の道場に指導に来られた。当時はものすごく怖かったが、徐々に豪放磊落にして気さくな人柄であることがわかり、その後に先生の奥様と私が同郷（鹿児島県の屋久島）であることが判明して以来、特にかわいがっていただき、私が結婚するときには仲人まで務めていただいた。

元谷先生に長男を紹介する。175㌢と長身だが、体重53㌔。マッチ棒のような体型

だ。「松永家に生まれて柔道をするのは、歌舞伎の家に生まれて歌舞伎をするのと同じことだ」という私の教えで小学校から柔道をしているが、誰に似たのか非常におっとりした性格で、勉強も柔道もいまひとつパッとしない。天然キャラで中学校柔道部の後輩にもイジリ倒されている。上位進出が期待された中学最後の県大会も、エンジンがかかる前にあっけなく敗退した。せめて母親（つまり私の妻）の凶暴な性格を少しでも受けついでいてくれれば・・・。ちなみに次男と三男は体格もガッチリしていて、物おじしない性格も格闘技向きだ。

「おう、柔道やっとんか？」。元谷先生がいかつい顔とドスの利いた声で長男に訊く。

「やっています」と蚊の鳴くような声で長男が答える。

「お前、この子に立ち技もやらしとんのやろな？」。笑いながら、今度は私に訊く。

「ええ、もちろん。大内と内股が得意なんだよな」。私が長男に振ると、長男が小さくうなずく。マッチ棒のような体つきからは想像もつかない切れ味鋭い大内刈りで、重量級の県トップ選手も投げることがある。親バカかもしれないが、私と違って足技のセンスがある。

「背負いも教えんかい。背負いも。一本背負いちゃうぞ。双手の基本的な背負いやぞ」。私の背中をバシバシ叩き、元谷先生が「ガハハ」と笑った。

「背が高くても、小さいうちはすべての基本を教えんかい！」。元谷先生の大声に長男は目を丸くする。

「あの先生、怖いね」遠ざかっていく元谷先生の広い背中を眺めながら、耳元で長男がつぶやく。

「父ちゃんの父ちゃんみたいな人だから、お前の爺ちゃんだぞ」と説明しながら、私は大事なことを思い出して付け加えた。「元谷返しのあの元谷先生だよ。全日本選手権の決勝まで行った先生だ」。

「おお」と長男が驚いて元谷先生の横顔を凝視する。漫画の一コマになりそうなほどの尊敬のまなざしだ。

3 年前、長野県教育委員会は「こどもの睡眠時間や勉強時間を減らすから」と中学生の朝練を禁止した。全国的にも話題となったニュースだが、それを契機に近所の中学生を集めて私が自宅の道場で始めた「中学生朝練教室」は、今では 4 つの中学校から多いときに 10 人以上の生徒が集まる大所帯だ。私と、柔術の黒帯でもある信州大学柔道部の教え子との 2 名で指導に当たっている。そこでは「払い・割り込み・担ぎ・くっつき」

「高橋返し」「元谷返し」「広田十字」「SRT」「三角ガラミ」「ホッテン」「イタチ絞め」など 10 連覇時代の京大柔道部の伝説的な技術から、「デラヒーバ」「ループ・チョーク」「ベリンボロ」など現代柔術の技まで、多くの寝技の講義と乱取りが行われている。元谷返しも、長男にとっては背負い投げや大外刈りのような基本技なのだ。

京大卒業後、信州大の医学部に再入学した私は、指導者が退職して潰れかかっていた信州大学柔道部の選手兼コーチ（のちに監督）となった。研修医になってからの数年間は忙しく、一時期は柔道から離れたが、再び休部状態となった柔道部の学生から泣きつかれ、数年間のブランクを経て監督に返り咲いた。今も大学生を指導している。

選手兼監督の時代には、高校時代に目立った実績はないものの、センスのある学生に恵まれ、若くて情熱も時間も持て余していたこともあり、何人かの選手をインカレに出場させることができた。だが、医者として監督に返り咲いてからは、多忙な診療業務の傍ら、週 1-2 回の指導が限界となった。逆風の中で柔道部を存続するだけで精一杯なのが実情で、監督というよりは、口も出すけど金も出す OB というスタンスで信州大学柔道部を支えている。

それゆえ、現在の大学生の多くが、多忙な学習カリキュラムとわずかな仕送りという厳しい学生生活を送っていることも承知している。七大学ですら、就活戦線は厳しいという噂も耳にしている。七大柔道の技術が低下している背景には、おそらくそのような事情もあるのだろう。

私たちの時代は「寝技の京大」と私学の強豪校からも怖れられたが、当時は大学入学後に柔道だけをしていればよかった。七大学の寝技の技術が低下していることに不満を言えば切りはないが、今は私たちの時代とは根本的に違うのだ。

一方で、七大柔道の伝統が消えていないことも承知している。信州大学での教え子の中には、私の寝技に感化されて卒業後柔術に転向し、黒帯となったものもいる。ときどき彼らに「恩返し」される私としては、柔術の寝技のレベルの高さは身に染みてわかっている。現役時代にお互い切磋琢磨した九大 OB の大賀幹夫氏や北大 OB の中井祐樹氏がブラジルに渡り、血のにじむような努力で身につけ、発展させてきた柔術の寝技の技術から較べれば、今の七大柔道の寝技のレベルはもとより、「寝技の京大」が全盛期に誇っていた寝技の技術も、所詮は学生のお遊びに過ぎないものだったと思う。

「高専柔道の技術を後世に伝えなければならない」と使命感に燃える七大学 OB もいるが、高専柔道の技術は現代柔術の技術に確実に取り込まれ、はるかに発展している。

高専柔道の遺伝子は、しっかりと受け継がれている。私はそう見ている。

さて、次は前述の岡本啓先輩への挨拶となった。

「おーおーおー」といつも通りの笑顔で迎えてくれる。私が知る限り、「寝技の京大」全盛期にあっても図抜けて強かった孤高の寝業師だ。卒業後も実業団で柔道を続け、中量級ながら全日本選手権まであと一歩というハイレベルな競技生活を続けた。

京大時代、厳しい練習が嫌になって一度は柔道部を退部した私は、そのまま海外留学（海外逃亡）したため留年し、結局は柔道への思いを断ち切れずに柔道部へ出戻った。そのため、5 回生時にも同期の巨漢・小幡太志とともに助っ人として七大戦に出場した。その最後の七大戦直前、4 回生の秋から急に強くなったと周囲も認めてくれていた私に、岡本先輩は上洛して稽古をつけてくれた。全く歯が立たたなかった。ショックで数日間は飯がノドを通らなかったことを、今でも鮮明に記憶している。私には永遠に雲の上の存在だ。

引退後の岡本先輩は京大大学院に入り直し、現在は富山県で大学の教員として勤務しながら、京大主催の寝技講習会などで七大柔道の寝技の技術を伝えている。「いやあ、伊藤（祐輝）はものが違うぞ！久しぶりにあのレベルの選手が七大学に登場したな」。その口調からは、京大の優勝を危ぶんでいるというより、スター選手の登場を喜んでいるように思える。大局的に物事を考える人なので、案外私の推理は当たっているのではないか。

いつのまにか、ほとんどの観客が食事のために試合場から出ていったため、私と長男も地上に上がり、日体大のフィールドホッケー部が練習しているグラウンドの脇で弁当を食べることにした。道場を出る際、「決勝は 1 時半からやで」と小松先輩が教えてくれた。

グラウンド脇で弁当を食べながら、偶然そこに柔道場を見下ろせる小さな観客席があることに気付いた。試合場を見下ろすと、ちょうど京大と阪大の選手がウォーミングアップをしていた。

「父ちゃん、嵯峨さんすごく強いね。飯田さん大きいね。関さんも下から返すのがうまいね」。息子の中では、すでに京大の取り役の選手たちはヒーローなのだ。

「でも、伊藤さんの方が強いかな」と息子が続けた。「どっちが勝つかな？」。

「伊藤君は高校チャンピオンで、一浪して大阪大学の医学部に入ったんだ。まだ 2 年生だから、あと 4 年もあるんだよ」と私が解説する。伊藤君のことは良く知っている。

福井県の名門進学校である藤島高校の出身で、高校時代から一貫して医学部志望。信州大の監督として、団体戦で勝つにはどうしてもあと1枚足りないと思っていた私としては、何かの縁があって信州大の医学部に入ってくれないかなと密かに願っていた存在だ。実際、七大戦の1週間前に講道館で開催された全国国立大学戦において、あくまで計算上だが、あと1枚ポイントゲッターいれば、信州大はベスト8に入ることができた。

さて、私にとって25年ぶりとなる七大戦観戦が実現した経緯であるが、いくつもの偶然が重なった。

5回生でも七大戦に出場した私は、周囲に期待されながらも、初日は九大の甲斐泰輔氏（北大柔道部OBである増田俊也氏の「七帝柔道記」の表紙に柔道着が飾られている、七大史上有数の超ド級抜き役）の前にみじめな引き分けに終わり、2日目の準決勝では、大将の重責を果たせずに北大の副将となすすべもなく引き分け、京大に七大戦11年振りの敗戦をもたらした。それ以来、私は七大戦を見たことがなかった。

栄光の京大柔道部において、A級戦犯として歴史に汚名を残したチキン野郎。それが私の自己評価である。それゆえ、今日までOB会にすら一度も出たことがない。

とはいえ、京大柔道部と完全に縁を切ったわけではなかった。信州大学に再入学後、「ミスター七大学」と呼ばれる京大柔道部の元OB会長・丹羽權平先生に「京大のコーチをしてくれ」と交通費までいただき、夏休みや春休みには時間の許す限り京大の道場に足を運んでいた。

医者になってからも、信州大学柔道部の監督として春先に京都で行われる寝技錬成大会に学生を引率して来たことがあった。もっとも、8年ほど前に信州大学のポイントゲッターが不可解な膝関節技で膝を傷めたことに腹が立ち、「膝関節まで極めるのであれば、京大柔術部と名乗るべきだ」と言い放って以来、当時の指導陣との関係がこじれ、京大柔道部からは徐々に疎遠になっていった（今回の七大戦を見た限りでは、あの膝関節への攻撃は、本当に不可抗力であったのかもしれない）。

そんなわけで、今の私は無名の雑魚キャラOBとして京大柔道部に寄付をするだけの存在だ。

七大戦に関しては、正確には一度だけ、卒業して数年後の七大戦会場に足を運んだことがあった。だが、試合会場の玄関で当時新進気鋭の格闘家として売り出し中であった中井祐樹氏とばったり出くわして京大敗退の結果を聞き、そのまま試合場にも入らずに

帰ってしまった。今にして思えば、無意識のうちに試合場に入らずに済む言い訳を探していたのかもしれない。

再び七大柔道を意識するようになったきっかけは数年前、名大柔道部の抜き役として活躍し、前述の九大甲斐君とも死闘を演じた舘野祐二氏との偶然の再会だった。彼の夫人の実家が私の職場と同じ長野市内にあり、さらに私の柔道場からは徒歩圏内にあり、彼が年に数回は奥さんの実家に帰省していることを知り、定期的に飲み会を開くようになった。七大学の話題で毎回盛り上がっている。

名大柔道部のエースとして活躍し、社会人なってからは黎明期の柔術界で活躍（本人は「全然活躍していない」と謙遜するが、複数の関係者の証言から、かなり鳴らしたらしい）した舘野氏の人脈で、前述の九大柔道部 OB にして柔術家の大賀氏が主宰する七大学柔道部の OB 会に初めて参加した。ちなみに大賀氏より私は 2 学年上であるが、私は現役時代の九大遠征で彼に絞められて「参った」をするという屈辱を味わった。彼とも四半世紀振りの再会であった。

時を同じくして、まったく別のルートであるが、京大時代に出稽古して以来の恩師で、現在も年に数回は師事している埼玉大教授の野瀬清喜先生（ロス五輪銅メダリスト）の計らいで、前述の北大柔道部 OB にして格闘家の中井祐樹氏とも、四半世紀振りの再会を果たした。7 月の夕暮れ、ハンチング帽をかぶった中井氏と講道館近くの歩道で握手を交わした瞬間、テレビ番組の企画で再会を果たしたかのような錯覚を覚えた。旧交を深め、楽しく酒を飲み交わしていると、京大時代の楽しい思い出が次々と蘇ってきた。ちなみに中井氏との関係であるが、私が 4 回生の七大戦で当時柔道を始めたばかりの彼と対戦し、一方的に攻められて何とか引き分けに持ち込んだというほろ苦い過去がある。

そして京大の同期でメーカーに就職した野田篤広との再会。会社で医療系の研究チームに配属された彼に、私が医師としてアドバイスを与えるという名目で、年に数回会うようになった。もっとも、激しく飲んで柔道の話をして、翌日は一緒に中学生の柔道を指導するだけなので、彼の仕事への貢献度はゼロに近い可能性がある。

いくつもの偶然から、再び七大戦を身近に感じるようになっていった。それでも、最終的に七大戦を見に行く決心はつかなかった。

ところが、さらに偶然は続く。京大柔道部の部報のバックナンバーで調べてほしいことがあると、平成 28 年の初めに大賀氏よりメールがあった。何も考えず、言われるがまま書斎にあった平成 4 年の部報を手に取り、パラパラとページをめくっていた私は、

ある記事の前で手が止まった。京大が負けた翌年の部報に掲載された「七大戦観戦記」である。恐る恐る、私はその原稿を読もうとした。だが、手が震えてページがめくれなかった。真冬だというのに、異常なほどの脇汗が体を伝った。

終わっていなかったのだ。25 年たった今でも、私はあの試合を振り返ることができなかったのである。あれからずっと、無意識の領域で私はあの試合を闘い続けていた。何もできずに引き分け、惨めに敗れ去った試合の結果を受け入れられず、25 年間も闘い続けていたのだ。震える手と胸の鼓動を抑えようとしながら、私はそう確信した。

何かがある。七大戦に行って、その正体を知りたい。今年の七大戦が 7 年に一度の東京開催となるのも、単なる偶然ではない。何か大きな力が、俺を七大戦の舞台に引き寄せている。何か抗えない力に導かれているに違いない。そんな思いがこみ上げてきた。

それでもまだ、迷いはあった。最終的な決断を、私は長男に託した。「旧七帝大で優勝を争う寝技だけの柔道大会に行きたいか？」と長男に訊いた。日帰りで長野から東京。しかも、長男が嫌いな寝技の大会。「行きたくない」と答えるであろう。万が一、「行きたい」というようであれば、今後こそ行ってみよう。行って、あの場所に何があるのか確かめてみよう。私はそう覚悟した。

「行ってみたい」息子は即答した。やはり単なる偶然ではない。そう確信した。

不意に、「父ちゃん、決勝戦始まっているよ」と長男が叫んだ。開始時間を 30 分繰り上げたのだ。決勝戦は地上階の観客席から観戦することになった。同じような状況であったらしく、元谷先生もすぐ隣で応援した。

平成 28 年 7 月 10 日 13 時、京大対阪大の七大戦決勝戦開始。両軍 15 人が整列するが、白帯も混じっている。私の時代には白帯でも抜き役という選手が存在したが、そういう感じではない。おそらくはどの大学も、今では 15 人のメンバーを集めることすら至難の業なのだ。

先鋒戦は京大優勢のまま時間切れ引き分け。次鋒戦で京大最初の抜き役である水谷昴栄君が登場。力強い立ち技と寝技でまず 2 人を抜いたが、3 人目を抜く時には雑な柔道が目につくようになる。せっかくのチャンスに手を放して相手がカメになると、「アホゥ、何で手を放すねん」と横で元谷先生が悔しがる。「普段から追い込んで稽古せんからや」と厳しい注文が続くが、まだ 3 回生の抜き役に期待している証拠だろう。ようやく白帯の 3 人目を抜き、4 人目と引き分けた。一気に京大が 3 点リード。だが、往年の

京大柔道部の緻密な柔道を知っているものとしては、どうにも納得がいかない。

「父ちゃんもこの大会に出たことはあるの？」。今さらながら長男が訊いてくる。天然キャラと言われるだけある。肯く私に「父ちゃんは何勝したの？」とさらに質問。

「一度も勝ったことはない。負けたこともない。全部引き分けた」と答えながら、ハッと我に返る。そうだ。私は1勝もしていないのだ。水谷君は七大学の歴史に名を刻んだ。だが、私は七大学の歴史の中ではただの雑魚キャラだ。何も言う資格はない。

引き分け2試合を挟んで、再び試合が動く。阪大中堅の渡邊哲薫君が試合開始とほぼ同時に鋭いタックルを繰り出すと、京大の選手はなすすべもなく吹っ飛ばされて、「1本」。

渡邊君が雄叫びを上げる。阪大ベンチが一気に息を吹き返す。タックルという原始的な技の持つ輝きが、試合場の張りつめた空気をさらに緊張させる。

荒々しい、原始的なケンカの手法。太古の昔、人間がまだ獣に近かったころから多用して来たであろう遺伝子に刻まれた戦闘手段。長男はタックルが反則ではないということにまず驚き、次にその魅力に取り付かれたようだ。

「下半身への攻撃を封印したことで、柔道はレスリングとの差別化を図ることに成功し、オリンピック種目として生き残ることができた」というのが、しばしば耳にする下半身への攻撃が禁止された経緯だ。だが、タックルを禁止することで柔道は総合格闘技としての命を削ってしまったのではないか。嘉納治五郎先生は、やがて柔道が世界のいろいろな格闘技と出会い、様々な技が生まれ、さらに発展していくことを楽しみにしていたと聞く。

そうだとすれば、タックルへの備えをなくした選手が一気に吹っ飛ばされる風景を、嘉納先生は天国から嘆いているのではないか。もちろん、柔道には打撃はない。純粋な総合格闘技ではない、だが、タックルという極めて原始的で有効な戦術を封印してしまった現在柔道には、もはや護身術としての価値はないのではないか。せめて下半身への攻撃を「反則ではないが、技としてのポイントもない」というルールに変更できないものか。

その後は1点ずつ取り合って、2点リードのまま試合は終盤に入る。阪大の四将は前主将の助っ人5回生鷹合宣宗君。大きな体の全身に闘志を漲らせている。遠目に見ただけでも、良い選手であることがわかる。京大の六将を力強い立ち技で畳に叩きつけると、そのまま抑え込んで合わせ技1本。雄叫びを上げる。その姿は、もはや神々しくすらあ

る。地鳴りのような歓声が上がり、見ている方もさらにテンションが上がってくる。母校京大には悪いが、最高におもしろい展開だ。

勢いが止まらない鷹合君に対して、京大は先ほどの試合でも殊勲の巨漢２回生飯田君が応戦する。両群の主戦力を見ると、京大は飯田君の後に前主将の助っ人５回生前川政司君と主将の嵯峨君が続く。阪大は１人挟んで準決勝で異次元の実力を垣間見せた２回生エースの伊藤君が控える。鷹合君が飯田君を取り、前川君と引き分ければ、嵯峨君は１人抜いての伊藤君との対戦となる。抜き役として上から攻める機会が多いであろう嵯峨君にとって、伊藤君との対戦は不確定要素が多い。失礼ながら、嵯峨君の組手はうまい方ではない。一瞬で宙を舞う可能性もある。そういう意味では、決勝戦最大の見せ場ともいえる一戦だ。

試合は一方的な鷹合君のペース。防戦一方の飯田君は、寝ては何度も腕を取られては苦し紛れの前転で逃れ、立ってはフライングカメで反則ポイントが累積する厳しい展開であったが、相手の猛攻を何とか警告止まりで防ぎ切り、値千金の引き分けに持ち込む。隣で長男が歓喜の声を上げる。

次に控える前川君と嵯峨君が、戻って来る飯田君を絶叫しながらハグする。熱狂する京大ベンチ。ここまで来ると、チャンスを生かしきれない荒っぽい寝技の攻防も、エキサイティングな展開を生み出す原動力として許せてしまう。

柔道が廃れつつある時代にここまで必死にやっている学生がいる。しかも、柔道で食っているわけじゃない。授業やアルバイトで忙殺されながらも、できる限りのことをしているのだろう。今の時代を精いっぱい生きているのだろう。それで十分ではないか。

井上靖が高専柔道の世界を描いた自伝的小説「北の海」は、高専柔道の伝統を色濃く残す七大柔道のバイブルである。そしてその中で述べられている「練習量がすべてを決定する柔道」こそが、七大柔道の真骨頂である。だが、もうそういう時代ではないことも事実だ。小さいころから激しい稽古に耐え、そこで開花させた才能を見出された優秀な戦士たちが、柔道の強豪高校や強豪大学に進学し、そこでもさらに激しい稽古を積み上げているのが、現代柔道だ。練習量だけではなく、練習の質も、本人の才能も周囲のサポートも、どれ１つとっても、七大学の柔道は遠く及ばないのが現実だ。「練習量がすべてを決定する柔道」は、七大関係者が誇るべき文言ではなくなりつつある。

今の七大柔道が本流の柔道に真っ向から挑戦するチャンスが少しでもあるとすれば、伊藤君のような圧倒的なスターを七大学全体で育て上げ、大学の垣根を超えた七大ファ

ミリーでその挑戦を応援していくことぐらいであろう。それで良いと思う。

次の試合が始まる。前川君が力強い帯取り返しを連発し、阪大の三将から技あり 2 つを奪って、合わせ技で 1 本勝ち。だが、力技を連発したためか体力の消耗も大きい。これに襲いかかるのは絶対的な抜き役の阪大副将・伊藤君。伊藤君の強烈な内股と関節技（召し取り）の前に防戦一方の前川君の体力の消耗がひどい。

「前川、お前の最後の試合やぞ！」突然、試合場に響き渡る大きな声が発せられる。何度も聞き覚えのある声。「ミスター七大学」こと丹羽先輩だ。「ゴンペイさん」。京大柔道部の関係者は親しみを込めてそう呼ぶ。にわかには信じられず、観客席を見渡す。確かにゴンペイさんだ。高齢で何度も大病を患い、ここ数年は健康状態がすぐれないと聞いている。すっかり小さくなってしまったが、あのゴンペイさんだ。私が現役の頃、毎週水曜日にわざわざ大阪から京都まで来られ、叱咤激励してくださったゴンペイさんだ。一体どうして、そんな体でそんなに大きな声が出せるのだ。命を削るような魂の叫びに心が震えた。長男に見られないようにしながら、とめどなく流れる涙を拭う。

前川が、息を吹き返す。反則ポイントを取るのが遅めのジャッジにも助けられたが、死闘を耐え抜く。終了間際、じっとしていられなくなった嵯峨君が試合場の手前をニワトリのようにせわしなく動き回る。あらん限りの声を上げて、全員が一丸となって前川君を励まし続ける。ついに試合終了。嵯峨君が前川君に抱き付く。その一体感に胸が締め付けられるような懐かしさを感じて、さらに引き込まれていく。

ついに京大三将・嵯峨君の登場。相手は阪大の大将だが、まだ 1 回生であり、今大会屈指の抜き役である嵯峨君と勝負できるレベルではない。

嵯峨君と私には、ちょっとしたつながりがある。昨年の 6 月、北海道で開催された学会の帰りに青森県八戸在住の友人で柔道好きな整形外科医の和田誠之氏に誘われるがまま、私は八戸に寄った。「帰り道だから寄ってってよ」という和田氏の話であったが、北海道から青森の南に飛行機で飛んで、そこから北のはずれの八戸まで新幹線とローカル線を乗り継ぐという長旅だった。

そこで私は八戸柔道連盟で指導する畑中孝一氏という畳屋さんと偶然の再会をした。元谷先生の紹介で彼の息子さんの診察をした経験のある私は、畑中氏と面識があった。彼が 3 人の息子さんを七大学の柔道部に入れたという話は、大賀氏からも聞いていた。

八戸柔道連盟の道場に到着するなり、私は畑中氏と 1 対 1 の寝技勝負になった。ガチンコ勝負だった。自分では年齢の割には動ける方だと思っていたが、私より 10 歳近く

年上の畑中氏は筋骨隆々であり、とんでもない怪力に加えて、スタミナも無尽蔵であった。お互いに決め手がないまま 30 分近くに及ぶ真剣勝負の末、最後は力尽きて畑中氏の前に屈した。

そしてさらには無尽蔵のアルコール勝負。ここでも私はなすすべもなく敗れた。

話は長くなったが、その畑中氏の教え子の一人が、八戸高校出身の嵯峨君であった。

勝負は一瞬でついた。相手の背負いを難なく潰した嵯峨君が電車道でベンガラに抑え込むと、相手はもはや抵抗できなかった。

「ほな、わしはもう帰るぞ。またな」。抑え込みに入った瞬間、勝利を確信した元谷先生が私に声を掛けた。おそらく元谷先生は、今でも時間の許す限り京大の道場に顔を出してくれているのだろう。だが、優勝の瞬間にそっと引き上げる。そういう生き方ができる数少ない指導者だと思う。深々と礼をして、元谷先生を見送った。「あくまで主役は選手やで」遠ざかっていく広い背中が、そう物語っていた。

やがてブザーが鳴り、歓喜の瞬間が訪れた。京大が 9 年振り 25 回目の優勝を果たした。抱き合って泣くじゃくる京大柔道部員たちのうめき声が、試合場にこだました。

「おれはもう、2 度とこの歓喜の輪の中に入ることはできない」そんな思いが浮かんだ。「そうなのだ。あの日おれは必死に手を伸ばせば手に届いたかもしれない栄光を、仲間との歓喜の瞬間を、自分の心の弱さのせいで、永遠に失ってしまったのだ」。

京大柔道部の伝統に傷をつけたことが、私の本当のトラウマではなかった。この高揚感と一体感をもう 2 度と味わうことができないことを、思い知るのが怖かった。25 年も経って、ようやくそのことに気付いた。

「父ちゃん、早く帰らないと今日も稽古するんでしょ？」と長男が言った。特に感動している素振りはない。今どきの中学生だ。

「おめでとう。そして、ありがとう」。抱き合う京大柔道部員に心の中で声を掛け、帰路についた。

繰り返しになるが、私は全柔連の中で事故を減らす取り組みをしている。そして、全国国立大学柔道連合会の会長である埼玉大の野瀬先生をサポートする形で、7 月の第 1 週に行われる全国国立大学柔道優勝大会（通称国立大戦）を盛り上げ、国立大学柔道部の部員を増やす取り組みに関わっている。今後再び七大戦が 7 月の第 2 週に固定されれば、七大学が再び国立大学戦に出場しなくなる可能性が高く（ちなみに今年は名大のみ

参加)、残念でならない。できれば一緒に国立大学の柔道を盛り上げていきたいと願っているからだ。

現在、国立大学の柔道部は重大な岐路に立たされている。京大柔道部が七大戦を勝ち続け、私学とも勝負できるレベルにあった頃に在籍し、信州大学柔道部の監督としても全国大会に選手を送り出した経験のある私にとって、国立大学柔道部存続の意義は、「無謀ともいえる挑戦によって己を成長させ、限界を超える」ことだと信じてきた。だが、国立大学の学生の置かれる環境が厳しくなるばかりの昨今、その理想が限界に来ていることも痛いほどわかっている。どこに国立大学柔道部の存在意義を見出せるのか、現在の私にとって最大のテーマの 1 つである。

それだけに、「限られた才能と時間の中で必死に努力して、15 人、あるいはそれ以上の仲間が一丸となれば、何とか手の届くところに栄光がある」という七大戦の現代的な価値が、25 年も経ってようやく見えてきた。

多くのトップ選手を育てた野瀬先生は、一橋大学柔道部の師範でもある。その野瀬先生が、七大戦と同じ高専柔道の流れをくむ三商大戦（一橋大・神戸大・大阪市立大で争われる寝技の団体戦）にも同じくらいの情熱を注いでいるのは、そういう意味があるのではないか。「もうひとつの柔道」という野瀬先生の口癖が、脳裏をかすめた。

再び世田谷の高級住宅街を歩いていると、後から来た小松先輩に追い抜かれた。やはりギクシャクした感じで、別れの挨拶をした。

「父ちゃん、おれ伊藤さんと戦ってみたい」不意に長男がそうつぶやいた。温厚な現実主義者の過激な発言に、一瞬耳を疑った。確かに不可能ではない。中 3 の長男が大学に入る頃、現在医学部 2 回生の伊藤君はちょうど 6 年生だ。再び胸の鼓動が高まる。

「そうか、それじゃあ父ちゃんの忘れ物を・・・」冗談交じりに笑いながらそう話し始めたが、そこまで言うのがやっとだった。それ以上何か言えば、抑えていた感情が一気に噴き出してしまいそうだった。

信号で小松先輩に追いついた。今度は自分から声を掛ける。ギクシャクした感じは、今はもうない。他愛のない話をしながら、駅まで一緒に歩いた。

小松先輩とは、どうしても触れられないエピソードがある。活躍が期待された 5 回生の七大学戦前、小松先輩が久し振りに道場に来てくれた。大学院生になって柔道から遠ざかっていた先輩に、全盛期の力はなかった。組んだ瞬間に力が逆転していることに気

付いた私は、かなり手加減して乱取りを終えた。すると先輩が失望したという表情でこう言った。「強うなっているという評判やったけど、全然やな」。

ものすごく後悔した。それだけに本当のことは言えなかった。おそらく先輩は、その数週間後の敗北につながる私の心の弱さを見抜いていた。

長野に帰る新幹線の中でも、長男は七大戦のことをずっと話していた。なかなか熱気は冷めやらなかった。伊藤さん、前川さん、嵯峨さん、関さん、水谷さん、そして一番のお気に入りの飯田さん。試合を振り返りながら、しゃべり続ける。

「父ちゃんの長く孤独な戦いを、お前が終わらせてくれるのか」。やがて眠りについた長男に心の中でそう問いかけようとしたところで、ハッと思い直した。父親の忘れ物と取って来ようが、親子で忘れ物をする羽目になろうが、本当はどうでも良いのだ。もし、七大柔道の舞台に息子が立ってくれるのであれば、親としてそれ以上何も望むことはない。世界一の果報者だ。

限られた才能と時間の中で、可能な限り心技体と友情を磨き上げ、全員が一丸となって優勝を目指す七大柔道。結果がどうであれ、そこには人間としての成長と感動がある。平凡に学生生活を送っていては絶対に経験することのできない興奮と感動がある。

それから 25 年経って、卒業後はそれぞれの道でがむしゃらに生きてきた仲間たちが再会し、お互い斯界に名を馳せるようになった立場から助けあい、協力し合って、日本や世界を動かしていく。七大柔道の本当の価値は、そんなところにあるのかもしれない。

夕日を浴びて気持ちよさそうに眠る息子の横顔を眺めながら、そんな事を考えていた。

平成 28 年夏、松永道場にて。